

Program 1 教科書解説

この課では、主に不定詞のレベルアップした表現の学習をする。

▲ 発展した不定詞の用法

1) 《tell(ask) + 人 + to 不定詞》

この構文は、中学の間は、もう丸暗記で覚えておくのがよい。

《tell + 人 + to ~》 …… 「(誰々に) ~するように言う」
《ask + 人 + to ~》 …… 「(誰々に) ~するように頼む」

例えば、ナンシーがケイコに “Stand up.(立ちなさい)” と言ったとすると、英文では次のようになる。

【例 1】 Nancy **told Keioko to stand** up.

ナンシーがケイコに立つように言った。

もしここで、ナンシーがケイコに、“Stand up, please.(どうぞ立って下さい)” と頼むように言ったとすると、tell が ask に変わるのである。

【例 2】 Nancy **asked Keiko to stand** up.

ナンシーはケイコに立ってくれるように頼んだ。

[注 1] この構文は、tell, ask が代表であるが、そのほか、advise(忠告する), order(命令する)なども使える。

【例 3】 He **advised** me to study harder.

彼は私にもっと一生懸命勉強するように忠告した。

2) 《want + 人 + to 不定詞》

1) と似た構文だが、この構文も丸暗記して使い慣れた方がいい。

《want + 人 + to ~》 …… 「(誰々に) ~してもらいたい」

【例】 { I want to go there. (私が行くのである)
私はそのへに行きたい。
I **want Sam to go** there.

私はサムにそこへ行ってもらいたい。(サムが行くのである)

※ 2 つの文の決定的な違いは、上の文が「私が行く」のに対して、下の文では、「サムが行く」点にある。

3) 《It is … for ~ to - 》構文

これはもともと、不定詞・名詞的用法の主語としての使い方が発展して出来たものである。

【例 1】 { To swim is fun. 泳ぐことは楽しい。
S V
To study English is difficult. 英語を勉強することは難しい。
S V

前ページの例文ではさほど問題はないが、下の例文では主語があまりに長過ぎて、頭デッカチでバランスに欠け、文章の安定感や美しさが失われる。

【例 2】 To get up early in the morning is good. 朝早く起きることは良い。
 S V C

そこで、《To get …… morning》の部分を後ろに置いて、It を形式的に主語としたのが次の文である。

It is good to get up early in the morning.
形式主語 真主語

この方が、非常に安定感があり、上の文より好ましい。このようにして出来た構文が《It is … to …》である。この it を『形式主語』, to 以下を『真主語』という。

また、It is の後は、「良い」とか「難しい」とか「大切だ」とか、の形容詞が続くが、「誰々ににとって良い(難しい、大切だ)」と表す場合が多い。この、「誰々にとって」というのは《for …》の形で to の前に置く。

つまり、最終的には、《It is … for … to …》の形で覚えておく。

【例 3】 It is difficult **for me to solve** this problem.
 この問題を解くのは私には(私にとって)難しい。

B. 《S be 形容詞 that …》の構文

この使い方は、文法的にその構造を説明しても中 3 では理解しづらい。もう連語的に覚えておいてよい。また訳し方も独特な場合が多い。大きくは次の 2 つに分かれる。

1) 《S be 形容詞》の目的語的な使い方

以前学習した通り、I know …とか I think …の後に文を続けるときに that でつないだよね。一般動詞ではないけれど《S be 形容詞》の形で意味的には know とか think と同じ使い方になっている場合がこれにあたる。

【例 1】 I am sure that he will come to the party.

私は彼がパーティーに来ることを確信している。→彼はきっとパーティーに来るよ。

※「確信する(I am sure)」え、何を? that 以下が目的語(O)的になっているのがわかるかな。

「何を」の部分に文を続けるのでどうしても接続の語が必要になる。それで that を使ったというわけだ。

いったん、リクツが分かれば「ふ～ん、そうか」ぐらいで十分。中学では次の 3 つしかないからもう丸暗記。

| | | |
|---|------------------|------------------------|
| ┌ | be sure that ~ | 「～を確信している」 → 「きっと～する」 |
| | be afraid that ~ | 「～が不安だ、怖い」 → 「～じゃないかな」 |
| | be proud that ~ | 「～を誇りに思う」 |

2) 《S be 感情形容詞》の場合

形の上では、1)の文と何ら変わりはないのだけれども、違うのは be 動詞の後に続く形容詞が「感情を表す形容詞」であることが共通している。

【例 1】 **I am glad that** he came to the party today.

彼が今日パーティーに来てくれてうれしい。

※ 「うれしい(glad)」という感情を表す形容詞があり、え、どうして? その原因・理由を that でつないだ文が示す、という構造になってできた構文だね。

これも、下の3つだけだから丸暗記☛

| | |
|-------------------------|------------|
| ┌ be glad(happy) that ~ | 「～してうれしい」 |
| ├ be sorry that ~ | 「～して残念だ」 |
| └ be surprised that ~ | 「～して驚いている」 |